

同人誌 (2017年2月号)

# 風狂

風狂の会

詩

詩二題	北岡 善寿
砂	出雲 筑三
お砂	高 裕香
英雄を思考する人へ	高村 昌憲
朝を開こう	金 得永
雪が降る	神宮 清志
賢い親	なべくら ますみ
インテリ	原 詩夏至

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界 (十五)	三浦 逸雄
--------------	-------

翻訳

アラン『わが思索のあと』 (三十一)	高村 昌憲 訳
--------------------	---------

執筆者のプロフィール

読者からのコメント (2017年1月号)

## 時計

住む者が絶えた家で時計が鳴る  
長い針が回って頂点に来ると  
時を打つだけのことだ  
寺の鐘のように重く  
韻々と響くのではない  
人が生きていた時から死後まで  
電池一つで時計は動き  
一時間毎に間の抜けた  
非情の響きを振りまいている  
不在の者には無用でも  
遠くから偶さか戻る者には  
生死の隔絶の益々の拡がりを  
無惨に知らせる音だ  
障子を巡らした表の部屋には  
誰が訪ねて来るのでもない  
位牌が空虚に光る仏壇がある

## 鳥の痼癩

ザクセンがどうの  
サラセンがどうのと言われても  
海辺で男が鰐鮫のように  
泣いていると言われても  
行って見たことがないのだから

何が本当か判ったもんじゃない  
判っていることは  
庭の池に網を張って  
水浴びを禁止したら  
ひよどりが癩癩を起して  
花という花を手当たり次第  
食いちぎってしまうことだ

砂はどこでも自由  
物質の顛末は砂  
翻弄されながら小粒で生きてきた

砂は創世記にはなかった  
惑星たちが恵みの水をもたらし  
水龍の咆哮のなか産まれてきた

砂漠に壮麗な虹がでる時は  
それは短い秋がくることを教える  
生けるものは厳寒に備えて忙しい

禅寺の方丈にもある白い砂  
ひらひらと砂の波紋に散るもみじ  
それはふるさとの景色

いつの間に砂漠になっちまったのか  
ついさっきまで森と草原だったのに  
砂は心にまで蓄積を加速していく

この海岸のお砂は  
どこから来たのだろう  
どこに行くのだろう

あの大きなお山から  
ころころ さらさら さらさらと  
流れて 流れて 来たのかしら

砂の上を歩けば足跡が  
砂を積み上げればお山が  
砂に描いた誓いのハートマーク

笑った太陽だけが温かく見守り  
風や波はさらさらさらと  
跡形もなくさらっていくのです。

でも、海岸のお砂は  
踏まれて、吹かれて、飛ばされても  
まだ、そこにあるのです。

人間は蝸牛の様に独りで  
生きて行けない動物です  
食事の時も農民のお蔭で  
食欲が足りて満足します

独りで生活できないので  
人間は社会的動物になり  
政治と関わりを持つので  
眺める戦争への不安の霧

この霧を晴らすのは何か  
それは利己ではない筈だ  
奉仕への心が晴らすのか  
各人が英雄になることだ

災害は英雄を生むと言う  
政治的な特性は行動にある  
行動は躊躇に勝ると言う  
各人は平凡でも英雄になる

個人が社会の中で働く時は  
独りで考え込まないことだ  
社会のために奉仕する時は  
迷わずに英雄になることだ

いつものように朝が開く  
車窓の彼方におぼろげな半島の山河  
高速鉄道でかすめる錦繡江山  
列車の音が春を乗せて運ぶ  
夜明けの故国の山河がいい

闇が開いて朝が来る  
鶏鳴く声を思い出しながら  
朝を引き寄せ南へ南へ  
母国研修で大田に向かう  
闇の消えた世の中がいい

韓半島に夜明けが来る  
半島の夜明けが迫る  
暗い世の中にも夜明けが来る  
毎日毎日 夜明けは訪れ  
闇を経て新しい日が来る

\* 本作品の日本語への翻訳は金一男氏による。



雪は空から降りてくる  
雪は夢をのせて降りてくる  
雪は思い出をのせて降りてくる  
雪は悲しみをのせて降りてくる  
雪は胸の奥にも降りてくる  
雪は猫の耳にも降りてくる  
雪は空から降りてくる

雪は降り積もる  
雪は人の上に降り積もる  
雪は慾の上にも降り積もる  
雪は喜悦の上にも降り積もる  
雪は憤怒の上にも降り積もる  
雪は雄牛の背中に降り積もる  
雪は遠い夢にも降り積もる  
雪は脆い心に降り積もる  
雪は人の上に降り積もる  
雪は降り積もる

雪の心はどこにある  
雪は怒りか悲しみか  
雪へ訪ねて尋ねてみたい  
雪よ何故にお前はこんなに冷たい  
雪よ何故にお前はこんなに美しい  
雪よ何故にお前はこんなにしつこい  
雪に満ちるこの苦しきはなになのだ  
雪よ何故にお前はこんなに儂い  
雪よ解いてくれこの不可解を  
雪よ答えてくれこの不条理を  
雪に覆いつくされて人は在る

雪の毒素にこの世は満ちた

雪の心はどこにある

朝 しばらくの混雑時間は終り

ほっと静かな車内

さっきまで一心に化粧をしていた女性もいなくなった

ベビーカーを押す父親が

優先席にいるわたしの隣に座った

幼い子は周囲を珍しそうに見回し わたしに目を止めると

ふっ と笑いかけてきた

わたしもためらわず笑い返した

男の子はベビーカーに乗せられたまま

母親から渡された絵本を開き

手を叩いては満足そうに笑っている

じょうず じょうず と言いながら

絵の白抜き部分にページ下のシールを張り付けるらしい

何回か遊んでいたのだろう

あるいは家族で電車に乗るたび与えられていたのかも知れない

つられた私も手を叩く 父親がすまなそうに頭を下げた

電車が止まると 男の子が私に向かった大きな声で

バイバイ と手を振った

わたしも バイバイ と大きな声で答え手を振った

父親はすまなそうに頭を下げると

ベビーカーを押しながら降りて行った

わたしは目的の駅に着くまで

居眠りも退屈もしないで過ごすことが出来た

あの子に子守りならぬ

婆さんお守りでもされたのだろうか

「おめえ、さしずめインテリだな？」  
ご存知「男はつらいよ」の  
寅さんは  
ある時  
インテリ美青年に  
そう訊ねた。

それなら  
寅さんに  
そう訊ねさせた  
日本を代表する名監督  
山田洋次さんは  
果たして  
インテリか？

「そりゃあ、インテリなんじゃないすか？」  
映画イノチの友人・Kさんは  
言下にそう答えた。  
「だって、日本を代表する監督ですよ？  
文化人ですよ？ そりゃ、頭いいでしょ？  
知識も教養も、そりゃ、あるでしょ？」  
「うん、まあ、そうだがね……」  
俺は 口ごもる。

「しかし 思うに  
果たして インテリは  
そもそも インテリに  
『おめえ さしずめインテリだな？』なんて  
訊かせるだろうか——主役の寅さんに？  
むしろ そういう物の見方の  
欠落している奴を  
日本を代表しても しなくても  
文化人でも そうじゃなくても  
知識や教養が あってもなくても  
世間じゃ 呼ぶんじゃなかろうか

『インテリ』と？」

「なるほど そいつも一理はありますね」

友人・Kさんは

腕を組み 頷く。

「しかし、それなら

『あいつは政治家だ！

あいつには 富も権力もある！

あんな政治家に 政治を任せるな！』と叫んで

見事 選挙に 当選したやつは

富も 権力も 手中にしているも

やっぱり『政治家』ではない。

そういうことですか？」

「うーん、そいつも一理はあるがね……」

俺は 口ごもる。

酒が 苦くなる。

「じゃあさ Kさん

一つ 訊きたいけど

こんな 俺たちって

さしずめ インテリかい？」

「さあね 知りませんよ。

興味もないですし」

酒を飲まない

友人・Kさんは

アイス烏龍茶のグラスを

コトリと置く。

「そうか どっちでもいいのか

そんなこと……」

俺は 腕を組み

静かに頷く。

「おめえ、さしずめインテリだな？」と

訊ねた寅さん。

訊ねられた美青年。

訊ねさせた監督。

思えば 三人とも

俺は 少しも  
嫌いじゃなかったのだ。



三浦 逸雄 「歩く男」 10号（油彩）

## 人間嫌いの拒否

人は恐らく気付いたことと思いますが、長年に亘る読書、経験そして考察の間に、私は人間嫌いが具合良く治りました。又、そこから多くの人間嫌いに傾かなかったのも本当です。その反対に私は、最悪でも人間に驚嘆していましたし、最も卑しい人間の世界に動物が少しは近付いていると理解することはありませんでした。動物は戦争を起こさないと言われていましたし、書かれてもいました。しかし、そのことで動物を人間よりも次元を高めたいと思ったならば、それは間違った思考でしかありません。しかしながら、馬鹿なことを言いたいと思うにも人間には偉大さがあり、偉大さを馬鹿にすることにも偉大さがあります。人間はあらゆる障害を乗り越えるのを誓ったのである、と人は言います。それはまさしく高邁な心による逆説です。自分で自由を知るこの陶醉は、自分本来の存在を中傷し、重力に従って眠らされている美德を全て疑ってかかる義務を負っているのです。そして、その様なものが美德の一般的教義となっても、もしもその教義が傾き続けたなら、それは最早美德でなくなります。ストア派の禁欲主義者たちとカントは、その十字路でこの偉大な思想を手に入れました。彼らは神々を考慮して、それを穏やかなものにししました。というのも、もしも監獄が恐くて正直になるのが下劣であるなら、地獄の恐怖によって正直になるのも下劣であるからです。そして〈神〉への反抗が、それ故に最高の義務になります。従って私の若い生徒たちが爪を使ったかの如くしてカントの道徳に反対しようとした時、生徒たちが行ったことを大変に良く知りました。彼らはその後、姿を変えて社会主義者になりましたが、私には同じ様に見えます。彼らは、あるが儘の秩序による志願兵です。ところで美德は不安定で軽業的であることを私は知っています。美德は何時も最後には寝て仕舞います。しかし私は人間において眠りの中に既に、過剰のものや単に脅威を表している自然よりももっと大きな拒否に気付いていました。眠る人間は、慎重さに疲れさせられます。同様に夢を見る人間は、目覚めなくなるまで恐怖を楽しむので、夢にも偉大さがあります。それ故に不眠の中には卑小さがあります。してみると確かに、騒音で眠れないことは動物性の一つのしるしです。動物性とは健康のことであると言われていています。でも私はそれを全て信じません。動物は私たち人間よりも多くの病気に罹りませんが、それは動物が少しも考えないからです。人間は考えます。そして、自分自身の動物性に従うのを受け入れません。そこでの激しい情熱は、全ての病気を複雑にします。人間が癒えるには、魂の偉大さによるしかありません。

ここでは小説、演劇、歴史が、哲学者よりもより一層良いものを私たちに教えてくれます。何故なら人間は不可能を試みなければ、退屈するからです。そして、私たちは必要な行動を再開してそれを理解し、優雅に飾り付け、その前や向こうの彼方へ行くのであると私は言いたいのです。何故なら優雅さは無償でもあると言いたいからです。戦争は、もしも人間が既にその栄光を軽蔑して、他のぼろ服へそれを投げやるが出来ない限り、今日でもなお最も高貴な仕事であり



続けます。権力の軽率さの一つは余りに強制することです。ヴェルダンの前線にいた二人の陸軍中尉は、陣地を守り切れないと判断して、兵士たちを撤退させる決心をしました。二人は直ちに銃殺刑に処される恐れがあったことを承知していましたが、事実銃殺されました。この退却には危険が確実にあり恥辱でさえあっても、最も栄光のあるものであったのを人はお気づきでしょうか。というのも恥辱も人間に圧力を加えますし、人間はそれに勇敢に立ち向かうことを知っているからです。自ら進んで地獄に落ちた悪魔の観念は、神学者たちを高める観念の一つです。

自由意志の領域は殆ど探究されたことがありませんでした。道徳家たちは、大変に有益な自分たちの戒律に挑戦を受けるのではないかと恐れます。指揮官たちは、極めて十分に武装された自分の命令に抵抗されるかもしれないと恐れます。この御し難い正直者を如何に支配して良いのか誰も知りません。そして、何処まで勇気が行くのかも誰も知りません。というのも何も恐れていない者を恐れさせたいと望むのは狂っているからです。それ故に政治は極めて奥深い術策を弄します。私は、この軽蔑すべき所業が指揮官たちに反対して未だ軍隊を訓練していなかったので、驚いています。人間嫌いはそれ故に国家の教義です。そして兵士が殺されるのは恐怖からであることを証明してやることは、極めて精巧な仕事です。軽蔑する術はそれ故に、指揮官の術の一つです。私は緻密さへ赴き、自由の教義がこれに極めて近い関係にある恩寵の理由と同じものによって、絶対的に緻密であることを私は確信しています。反対に自然の力に関する教義は、全く粗雑です。私が気のない思考を時々憎むのも、その偉大な言葉で一杯の動物的な意味の中です。もしも動物的であるのが真実であるとするなら、諦めて十分に受け入れなければならないと人は言うでしょう。しかしそれはまさに、動物に反対して人間の味方になることなのです。理解出来ないのを拒否して思考する方法それ自身が証拠であり、自由の証明です。私たちが思考において自由であると仮定すれば、何らかの実例がなければならず、泥の教壇から哀れな博士を降ろすには幾つかの成功も必要です。しかし実を言えば、成功は輝いています。愚かさの普遍的仮定は、如何なる宗教も如何なる栄光もマキャベリ主義や卑劣さによらなければ説明しません。これらは人間に対する二つの侮辱です。指揮官たちは、敢えて言ったり無視する術を知っています。そして彼らの術策の原則は、人間を信用することなのです。

悪徳そのものも、動物的なものだけでは上手く説明出来ません。それで自由の愛や自由を望む全ての意味合いを示しても、十分ではありません。もしも愛の否定が、動物がそうである如く甘受され無言であったなら、動物たちが正しいと信じることもあり得るでしょう。しかし愛の否定も、愛そのものよりも度を過ぎしていない訳ではありません。地獄に落とされた陶醉がそこで示していることは、罪であるのと同じである如く、少なくとも崇拜したくないものを踏みつける激情に大変近いものです。人は動物よりも無雑作に人間を殺します。そして渴きや大食から来るようなものである完全な陶醉に関しては、反対に人間のしるしを持っています。それは気高い部分の自殺でしかなく、神々に投げつけた挑戦でしかないのです。勿論、人間の全生涯は神々への挑戦であると言いましょ。というのも神々は、全てに心配しているというのも本当であるからです。この観念は宗教に関する全ての眺望を十分に明らかにしているのが分かります。人は神獣

、前兆、神託そして私たちが今でも慎重に考えることに基づいている狂気の全てを理解しますが、そこに止まることは出来ません。世界の全ての戦士たちが行ったように、神託に挑まなければなりません。もしも信者が自分の神に相応しいなら、極めて明白に自らを否定する勇気を持った宗教の後に、別の宗教が次々に表れて来ます。そして最後のものになるまで全ての宗教を捨てなければならず、それが最も低い場所においても最も高くなるのであり、何時もそうやって行ったのです。そして諸宗教の系列において、最も私の興味を引いたのはその系列ではなく、寧ろ如何なる対象であっても私たちの思考において避けられない弁証法であったのを理解することでした。何故なら、〈自然〉の美しさは永遠の序章であり、叙事詩の賛美歌は永遠の発展であり、精神の崇高さは永遠の太陽であり、瞬く星空の下での静かな眠りは二行詩でしかない時、あるいは一文でしかない時、永遠の物語になるからです。先ずこれらの意味合いを耳が聞き、そして詩は思考よりも正確です。その様にして私は全ての神々を殺しました。そして全てを生き返らせることになったのです。というのも、未開人たちの思考が私たちの思考と絶対的に無縁であると主張することは非常に愚かです。根っからの愚かであり、私に言わせれば上品ぶっても愚かな様にさえ見えたからです。反対に私が先に言った人間嫌いを拒否したことで、私は未開人たちも私たちの様に見事に思考していたことを最初から憶測していました。この分析は直ぐに検証されました。もしも或る種の動物たちを育てて調教するのを仕事とする人々であっても、何か可笑しいことがあるのでしょうか。奇妙な形をした壺で食べるくらいなら殺される方が増しだとするのを別にしても、社会階級という精神はあらゆる形而上学的偉大さを持っています。私たちも他に何を作っているのでしょうか。私は、ヴォルテールの散文が人間を嘲笑するにつれて次第に人間の味方になることに気付きました。この様にして立派な行いは深部を切り開きます。（完）

## 執筆者のプロフィール（五十音順）

---

### 出雲 筑三（いずも つくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めつき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ会員。時調の会・世界詩人会議会員。

### 北岡 善寿（きたおか ぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んでいる無能なジレットタントにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『樞』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

### 金 得永（きむ どうくよん）

一九五六年大韓民国全羅南道新安郡生まれ。木浦、光州、ソウルで海を故郷に宗教に傾倒しながら育つ。一九七九年、光州教育大学を卒業。一九九一年、日本奈良教育大学大学院修了。一九九五年檀国大学校教育学博士号（日本研究）を取得。二〇〇一～二〇〇四年、日本の岐阜韓国教育院長に派遣勤務し、『古代からの韓日交流の歴史』出版。その後、『日本生涯学習都市フロンティア』、『日本の生涯学習まちづくり論』、『人性千字』、『教師のためのソ-シャルスキル』、『生涯学習まちづくり論』などを韓国で出版。二〇一五年から日本東京韓国学校の校長として赴任。子供たちが幸せな世の中、教室の中の幸福条件を整備中。目に見えない教育にも力を尽くしている。休日は、日韓古代史を中心とした神社や寺院を巡礼。古代人と、自然との対話を試みている。「ジュリアを讃えて」の詩は日本での処女作である。

### 高 裕香（こう ゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年

度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ会友、時調の会・世界詩人会議会員。

### 神宮 清志（じんぐう きよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近は視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「落」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

### 高村 昌憲（たかむら まさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。学生時代に同人誌「遡行」を発行。詩集は『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A & E・二〇〇四年）。翻訳は『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤志詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九六年に個人誌「パープル」創刊（四〇号から電子書籍）、同年「風狂の会」会員になる。一九九八年に「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年から電子書籍（ブクログのプー）に、随想集『アランと共に』及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ』『文明国の戦争で真の原因になるもの』『神々』『神話序説』『家族感情』『わが思索のあと』などを登録中。日本詩人クラブ会員。

### なべくら ますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会 日本詩人クラブ 時調の会 各会員

櫛自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつゞら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

### 原 詩夏至（はら しげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）等。現在短編小説集『永遠の、地上の（仮題）』刊行準備中。典型的な「ウルトラマン世代」の「怪獣少年」で、齡知命に達した今もなお、心のどこかがその永遠の「神話」の森を彷徨い続けている。十代後半から二十代前半にかけてカルト的な宗教活動に没頭。その後フロイト、ユング、ラカン等の精神分析家の著作に傾倒し、

一時は専門の心理臨床家を志したこともある。好きな書き手はJ.G.バラード、M.ピーク、尾崎翠、埴谷雄高等。絵画ならダリ、デルヴォー、バーン＝ジョーンズ、音楽ならドヴェツシー、ラヴェル、セロニアス・モンク等に魅かれる。日本詩人クラブ、日本短歌協会会員。

### 三浦 逸雄（みうら いつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。

一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。二〇一六年は京都での作品発表を予定している。

（以上）

## 読者からのコメント（2017年1月号）

---

アラン『わが思索のあと』（三十）感情：難しいことは分かりませんが、愛は、あらゆる感情の中で、魂に与える最高の感情だと思いました。

タクラマカン：タクラマカン砂漠も、今は観光できるのですか？悠久の砂丘に射す古城の夕陽、素晴らしいでしょうね。

階段の下：夢が壊れ、疲れ果て、帰ってみれば冷たい部屋。そういう時もあるでしょうが、遠くかすかに、小さな光が・・・と思うのです。

新年を迎えて：もうすぐ還暦、忙しくよく働いてこられましたね。ここらでちょっと一休み。薔薇の花の湯に、おいしいご馳走、クラシック音楽。癒されますね～。

市場の森：売り手と買い手の間に、公正な価格がつけられますように。自由と平和な日常でありますように。

波のふるさと/犬吠埼にて：寄せては返す海原の波を見ながら、歳月や人生や永遠に続く命をうたって共感しました。

てつわんあっとむくんのたいけん（Ⅱ）：21世紀の未来は、色々問題があって、鉄腕アトムも驚いているでしょうね。

忘れ物：公園によくある忘れ物が、忘れないで暖かい手に包まれて良かったですね。幼稚園児の歌声が聞こえて・・・

独白：宮ノ平の、「日向和田臨川庭園」を知りました。多摩川のほとり、梅と紅葉の名所の静かな庭園だそうですね。桃源郷のようだった「吉野梅郷」の近くだと知りました。2014年、梅の病気で公園の全ての梅の木が切り倒されたことを思い、「臨川庭園」の梅の木は大丈夫だったのか心配になりました。

（以上）

同人誌 風狂 (ふうきょう)  
第31号 (2017年 2月登録)

<http://p.booklog.jp/book/112812>

著者：高村昌憲

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/112812>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト